

「ひとり」論

——アーレントによる solitude, isolation, loneliness 区分からの試論——

権 安理 (コミュニティ政策学科教員)

はじめに

友人がいないとき、あるいは友人と会えないときに孤独や疎外感を感じることはあるだろう。だが他方で、友人と一緒に楽しんだり騒いだりする渦中で、ふと孤独や疎外感を感じることもないだろうか。本エッセイは、明示的にはアーレントの思想に依拠しながら、「ひとり」という状態について考察するものであるが、隠されたモチーフは、この感覚の源泉をめぐる試論を展開することにある。

私の専門は公共哲学、社会哲学であるが、それが“公共”や“社会”に関する学問・哲学であるゆえに、この分野では「他者との関係」が積極的なテーマとなっている。だが他方で、“哲学”は「ひとり」であることを研究対象としており、その状態に否定的であるわけではない。むしろ、高い価値を見出してきた。本エッセイでは、その「ひとり」ということについて、身近な例を用いながら哲学的に考察する。

I. ポッチ飯をめぐる——アーレントへと至る道程

学生が“ポッチ飯”という言葉を使うことを耳にするようになって久しい。ひとりでご飯を食べることが「友人なし」を意味すると解され、少なからぬ学生がそれを過剰に恐れるがゆえに、この言葉が普及したのである。関連する言葉として、“ヒトカラ (ひとりカラオケ)” や “ひとり焼肉” もある。もっとも後者二つでは、ひとりをあえて選択していることも多いため (例えば、カラオケの練習をするため)、ポッチ飯とは相違があるらしい。だがいずれにしても、ひとりであることへの敏感さや不安がこのような言葉を生み、普及させるのだろう。

“大人”である私から見ると、ポッチ飯に実用的な不利益はなく、友人の有無や数にこだわる必要はないようにも感じる。だが、事態はそう単純ではない。ポッチ飯を恐れる学生は、極論を言えば友人をも恐れているからだ。若い世代の友人関係を扱った、社会学者の土井隆義による『友だち地獄』という著作のタイトルには、その点が象徴的に示されている。友だち天国ではなく、友だち地獄である。

『『空気を読む』世代のサバイバル』という副題を持つその著作には、過剰なまでに気配りしながら空気を読み合う若者の関係性が詳細に描かれている。そこには、

一方で相手を気遣う優しさがあるが、他方で自分が“KY”的な振る舞いをするこ
とへの警戒心がある（土井 2008）。友だちがいないことは回避されるべき事態だが、
「教室は たとえて言えば 地雷原」という中学生の川柳が端的に示すように、友人関
係は不安や恐怖の源泉でもある（土井 2008：9-10）。ボッチ飯という言葉が主に大
学生のメンタリティを、友だち地獄がもう少し若い世代のそれを表現しているのは
確かだが、この二面性は看過できない。ボッチ飯の背景にあるダブルバインド（相
反する原理に二重に拘束されること）を理解する必要がある。

ここで、ボッチ飯を社会現象とみなして（実際そうであるが）、それをふまえた“若
者論”を展開することもできよう。あるいは、「友人あり」の方に目を向けて、ある
べき友情・関係性とは何かという考察をすることもできよう。だが本エッセイでは、
むしろ次のような問いをしたい。回避されるべきとされる「ボッチ=ひとり」とは、
そもそもどのような事態なのか。「ボッチ=ひとり」を哲学的に考えることはできる
のか。以下では、ハンナ・アーレント（1906～1975：ドイツ生まれのユダヤ系女性
思想家。亡命先のアメリカで名声を得る）の思想の一部に言及しながら、この点に
ついて考察する。

Ⅱ. アーレントにおける「ひとり」について——solitude、isolation、loneliness

1. solitudeについて

アーレントは自らを政治理論家とみなしており、哲学者とは自認していない。だ
が、ひとりという状態について興味深い考察をしており、その状態を三つの位相に
分けて考えている。solitude、isolation、lonelinessの区別である。そのうえでアー
レントは、特にsolitudeに高い価値を認め、lonelinessこそが回避すべき状態である
と考えた。もちろん彼女は、ボッチ飯について関心があった訳ではなく、その考察
は全体主義の起源の検討と批判という思想枠組みに位置づけられるものである。し
たがって本エッセイは、アーレントの思想の正しい読解というよりも、問題関心に
引きつけた解釈、試論であることを断っておく。

まず、solitudeとはどのような事態なのか。「孤独」や「独居」などと訳される
solitudeについて、アーレントは次のように説明している。

……孤独な (solitary) 人間は独り (alone) であり、それ故「自分自身と一緒に
いることができる」。人間は「自分自身と話す」能力を持っているからである。換言
すれば、孤独 (solitude) においては私は「私自身のもとに」、私の自我と一緒におり、
だから〈一者のうちにある二者〉である……。 (アーレント (1974) 1981：321) 括
弧内引用者

アーレントの言葉は難しいが思い切って解釈すれば、solitudeはテレビ番組『孤独のグルメ』における主人公の「孤独」に近い意味を持つとも考えられる。周知のように、『孤独のグルメ』は、主人公の心のつぶやき＝内省を、役者が口を開けて話すセリフではなく、その声を使ったナレーションとして視聴者に伝えるというアイデアを持ったテレビ番組である。

それを確認したうえで、アーレントの引用に戻ろう。solitudeは内省的・反省的な状態を意味する。つまり、ひとりになって自分自身と対話している状態である。我々は「思考」をするとき、頭の中で「話し」をする。思索、反省、追憶するためにはそのような対話が不可欠であるが、その相手は誰か。私の中の“もうひとりの私”であり、私のなかの“他者”である。このように考えると、思考は「ひとり／孤独＝solitude」の内ではなされるものではあるが、他方で自己内他者との対話を必要とする。

したがって、solitudeは文字通りのひとりではなく、自身にとって最も身近な他者・仲間と繋がっている状態を示すことになる。それゆえに、solitudeは回避されるべきというよりも、むしろないと困る状態なのである。『孤独のグルメ』の主人公は、solitudeという状況で食事をすることによって、店の雰囲気、料理の味や店員の気遣い、客の様子などに深く思いを馳せることができる。

2. isolationについて

次はisolationである。「隔離」や「孤立」などと訳されるisolationについて、アーレントは次のように説明している。

孤立 (isolation) とは、人々が共同の利益を追って相共に行動する彼らの生活の政治的領域が破壊されたときに、この人々が追いこまれるあの袋小路のことである。けれども孤立 (isolation) は、力を破壊し行動能力を破壊しはするが、いわゆる人間の生産活動なるものに手をつけなければいか、むしろこの生産活動のために必要なのである。(アーレント (1974) 1981 : 319) 括弧内引用者

isolationは他者と共同・協働を必要とせず、人がひとりで作業に集中しているときに顕著な状態である。まさに「我を忘れて……」という状態であろう。卑近な例に引きつければ、isolationはヒトカラやテスト勉強をしている状態に近い。特に私生活において、ひとりで作業に集中しなければいけないことは多々ある。他者との共同・協働が意図に反してできないのか、自分の意志でそうしないのかは重要な差異であるが、いずれにしてもisolationはプライバシーが確保され、尊重されるからこそ可能となる状態である。

つまり、「ひとりで何か作業に集中・没頭したければすることが可能であり、そして実際にそうすること」がisolationという状態であると考えられよう。「袋小路」を逃げ道なしの突き当りと考えたと否定的な側面が際立つが、他方でそれは隠れ潜む居場所でもある。我々は他者と関わっているばかりではない。思考のためのsolitudeも大切であるが、ひとり作業に没頭するisolationの機能は見逃せない。

3. lonelinessについて

最後はlonelinessである。「孤立」や「見捨てられていること」などと訳されるlonelinessについて、アーレントは次のように説明している。

全体主義的支配はlonelinessの上に、すなわち人間が持つ最も根本的で最も絶望的な経験の一つである、自分がこの世界にまったく属していないという経験の上に成立っている。(アーレント (1974) 1981 : 320)

「自分がこの世界にまったく属していないという経験」は根無し草や余計者という表現でも言い換えられているが、それはまた「他の人々によって認められ保障された席をこの世界に持っていないという意味である」とも説明されている(アーレント (1974) 1981 : 320)。全体主義的支配の部分については(本当は重要であるが)割愛してこの引用部分を見ると、lonelinessは、まさにボッチ状態を意味するようにも見える。「世界」を教室や学校に言い換えるとなおさらそうであろうし、「席」という比喩はボッチ飯を連想させるかもしれない。だが、アーレントの見解はもう少し複雑なものであり、そのことは次のように言っている点にも示されている。

lonelinessは孤独solitudeではない。孤独(solitude)は一人であることを必要とするに反して、lonelinessは他の人々と一緒にいるときに最もはっきりとあらわれて来る。(アーレント (1974) 1981 : 320) 括弧内引用者

文字通りのひとり状態は、直座にlonelinessを意味するわけではなく、むしろ他者と一緒にいるときにこそ顕在化する。なぜそうなのか。その理由は、アーレントがlonelinessを複数の欠損状態を意味すると考える点にあるだろう。

まずlonelinessは、思考に必要なひとり状態としてのsolitudeの機会が奪われていることを意味する。次にそれは、作業に没頭している状態としてのisolationの機会も奪われていることを意味する。そして先述のように、isolationは他者との共同・協働がない状態を意味した。三つの欠損状態である。そうであるとするならば、アーレントは次のように主張していることになる。すなわち、「他人と一緒にいるとき」

が直ちに他者と共同・協働することを意味するわけではない、と。だからこそ、我々はひとりのときのみならず、「他者と一緒にいるとき」ですら、lonelinessを感じるのではなかろうか。

結びにかえて

ボッチ飯を揶揄するのは簡単であるかもしれない。だが、そうする“我々”側に、solitudeは確保されているのか、isolationという状態はあるのか。友だち地獄に埋もれずに、本当に他者と共同・協働しているのか。アーレントに依拠しながら、ひとりについて考察してきた本エッセイであるが、結局それは他者との共同・協働、つまりは他者との関係性への問いに行きつくことになる。

哲学は問い（「ひとり」とは？）から始まるが、その帰結もまた問い（「他者との関係」とは？）である。ここに儂さを感じるかもしれないが、アーレントに拠りつつ、ひとりという状態について検討した“後”で「他者との関係」を考える“今”と、そうする“前”に漠然と考えていたときの問題関心は違っているのではなかろうか。そうであるとしたら、本エッセイを読む前の自分と、読んだ後の自分が違ったものとして現われていることになる。すなわち、「〈一者のうちにある二者〉」という状態である。

【文献】

アーレント、ハンナ、1974（1981）、大久保和郎・大島かおり訳『全体主義の起原3』みすず書房。

土井隆義、2008、『友だち地獄——「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書。